

提言 『国際交流平和都市 新生“ひろしま”』を目指して

～50 年後も輝き続ける広島であるために～

<概要版>

本提言では、「50 年先」というキーワードを使用しているが、単に 50 年後をピンポイントにイメージしたものではなく、まちづくりには相応の時間を要することから、理想とするまちづくりのために必要な時間的規模と、一方でまちづくりのための諸条件が非現実的な空想のものとならないような時間的規模を考慮し、「50 年」という言葉で我々が対象とする「将来」を表現したものである。なお、「将来のまちのイメージ※1」も掲載しているが、50 年後をピンポイントにイメージしたものではない。実際に 50 年が経過した際には、このようなまちの姿を経て、新しい広島が生まれていることを期待する。

I. 現状把握・課題抽出編 (提言にいたる経緯、あるべきまちの姿)

Step1 まちづくりに関するこれまでの提言や現状を踏まえた「議論すべき課題」の検討 ➡ p.1

Step2 活動テーマの設定「広島におけるまちづくりの俯瞰的な検討について」

- ・当同友会では、都市機能に関し、平成 17 年度～平成 24 年度にかけて、主に「二葉の里三丁目地区」に関する議論・提言を行い、その集大成として平成 25 年 4 月に『国際交流平和都市 新生“ひろしま”』を目指して～二葉の里三丁目地区高度利用グランドデザイン～を取りまとめ、提言を行った。
- ・その後、「二葉の里三丁目地区」では、上位計画や提言に沿った開発が進展し、また、「広島駅南口周辺」や「広島大学本部跡地」などの広島市内未利用地において再開発の計画や検討が進み、それぞれのまちの姿が見え始めてきた中、新たな活動テーマについて委員会などで議論を行った。
- ・議論の結果、これまで個々の開発に関して議論を行ってきたが、広島全体を活性化すべく、今一度マクロ的な視野に立脚し、「広島におけるまちづくりを俯瞰的に検討すべき」との結論に至り、活動を開始した。

Step3-1 一般論として先見的に課題認識された事項や前提となる現在の環境 ➡ p.2～3, p.4～6

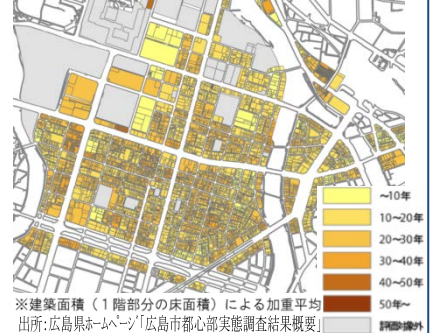
- ・広島は、戦後、市民や行政などが一体となって復興を進め、昭和 30 年代半ばから高度成長期を迎え、急速に成長・発展を続けてきた。それから約 50 年が経過した現在、多くの課題を抱え、まちはスプロール化し、まちの賑わいを支えてきた建物やインフラ設備も老朽化するなど、広島はまさに「まちの更新時期」に来ている。

- ・特に、成長エンジンの役割を果たしてきた「紙屋町・八丁堀周辺地区」には、旧耐震基準の公的施設や民間建物なども多く残っており、今後の建物や都市機能の更新を含めた新たなまちづくりの方向性如何が、この先 50 年の広島の繁栄を左右すると言っても過言ではない。

加えて、再開発と陸の玄関口とが相まって、賑わいのあるエリアになるであろう「広島駅周辺地区」と共に、両地区が活性化し、相乗効果により広島全体としての賑わいを創出させることは重点的に取り組むべき課題である。

- ・さらに、人口減少や高齢化社会、深刻さを増す地球温暖化への対応といった激しい環境変化の中、集約型都市構造(コンパクトシティ)への転換が大きな課題となることに加え、都心部とそれと連動する拠点地域の賑わいの維持、向上も重要な課題である。

【図表】広島市中心市街地における街区別建物築年数



Step3-2 委員会およびワーキンググループにおける議論を基に把握した現状と課題 ➡ p.2～3, p.7～17

「広島の賑わいが低下している」とよく聞くことがある。このテーマを起点として、様々な議論を行い、要因について考察した。⇒ 主な要因：街中からの情報発信力の低下とともに都心部での人の活動量(特に若者)が減少

※本議論において、提言の内容や括り、時間軸等に制約をかけず、忌憚のない自由な意見交換を行った。その際、の多種多様な意見は、本提言におけるベースとなっている。(本編にも記載しているのでご参照いただきたい。)

↓ (Step3 での認識を踏まえ) ➡ p.18

Step4 あるべき姿の検討 ➡ p.19～23

- ・Step3 での課題認識や広島の復興のあゆみ、現在の賑わいの状況について感じた思いとともに、様々な課題や意見などから将来のあるべきまちの姿をイメージし、どのようなまちを創っていくべきか、他の都市の先進事例も学びながら、何が必要かについて議論を重ねた。

- ・この先 50 年、広島はどんなまちになってほしいかについて、グランドデザインとも呼べる以下(1)～(4)の理想像をメンバー間で共有した。その理想像は、「国際交流平和都市 新生“ひろしま”」を目指すものであり、「ひろしま」の普遍的な理想とも呼べるものであると考える。

- (1) 広島ならではの確固たるアイデンティティとまちブランド力を持ち、常に賑わいと人々を惹きつける魅力に溢れたまち
- (2) 世界平和の情報発信 No.1 都市として、国内外からリスペクトされ、人々が集い、地球平和の価値共有が叶うまち
- (3) 慈愛に溢れたまちとして、様々な世代が住み、働き、学び、憩い、遊び、共に成長してゆくまち
- (4) 中四国地方の中核都市として、周辺地域、周辺都市との共生を力強く牽引するまち

まさに「まちの更新時期」にあるこの広島が、50 年先のグランドデザインを構想・実現し、50 年先も輝き続ける広島であるために何が必要か、2 つの時間軸から提言を行う。

Step5-1 早急に取り組むべき事項

1. 今何が必要か ➡ p.24～39

Step5-2 (今から)中長期的視野で検討すべき事項

2. 50 年先を見据えたシナリオ案 ➡ p.40～46

〔図表(再掲)〕 広島市中心市街地における街区別建物築年数



※建築面積（1階部分の床面積）による加重平均

出所：広島県ホームページ「広島市都心部実態調査結果概要（平成27年6月広島県・広島市）」

II. 提言編

II-1. 今何が必要か

50 年先のランドデザインを構想し実現して行くためには、50 年後の理想像から、そこへと向かう中間地点となる 10 年～20 年後の理想像を睨み計画的にまちづくりを推進する必要がある。
そのためには、産官学民一体となり、今この瞬間からアクションを起こす必要がある。

(1) 産官学民が一体となって継続的にまちづくりを議論、推進出来る新たな仕組み・体制づくり

☞ p.24～29

- ① 全体的なまちづくりの計画、推進等に関わる行政を中心(委員会等含む)とした仕組みづくり ☞ p.26
行政や学識経験者などの専門家のみならず、民間企業や市民も積極的にまちづくりに関わっていく必要がある。

【必要な仕組み、組織】 ※現在の仕組みのグレードアップ(拡大、拡充)

- ・様々な視点を持つ企業や市民も含め、定期的且つ継続的に意見を交換する組織
- ・特に、若者を含め、様々な世代が中長期のスパンで議論、活動できる組織

→まちづくりについて議論できる多種多様で広範囲なネットワークを構築する。

→検討過程においても積極的に情報公開し、多くの市民を含め、より丁寧な合意形成を図る。

→策定したビジョンも継続的に PDCA(Plan→Do→Check→Action)を回しながらフォローし、そのあるべき形にしていく必要がある。

- ② 業務・商業地に関わる民間(特に企業市民)を主体とした仕組みづくり ☞ p.26～28, 29

更新時期にあるこのまちが統一性の無いまちとならないために、更に、人口減少という縮小時代を迎え、都市間競争に打ち勝つためにも、街区や地区を超えてまちづくりを考える組織(エリアマネジメント、協議会等)が必要である。

【広島に必要であり、今後、重要な役割を果たすと考えるエリアマネジメント・協議会(以降、エリマネ)等】

- ・楕円形のまちの核となるエリアを中心として活動する

「広島駅周辺を活動範囲とするエリマネ」、「紙屋町・八丁堀周辺を活動範囲とするエリマネ」

- ・「広域的なマネジメント(複数のエリマネの横断的な連携と、関係組織全体(行政等含む)との連絡、調整、協議など)を担う組織、体制」

→都心部のみならず、周辺地域や各拠点エリアにおいても、各エリマネが其々の個別目標に向かい活動を進めることに加え、広域連携組織により、広島全体を盛り上げる活動とすることができる。

- ③ エリアマネジメント(協議会)組成のための支援 ☞ p.28

- ・エリアマネジメント(協議会)が組成され、継続的に活動していくことは非常に重要なことである。その活動の主役は当該エリアで様々な事業活動を行う受益者であるが、その活動は公共性も併せ持つものでもあり、産官学民が一体となって盛り上げていく必要がある。

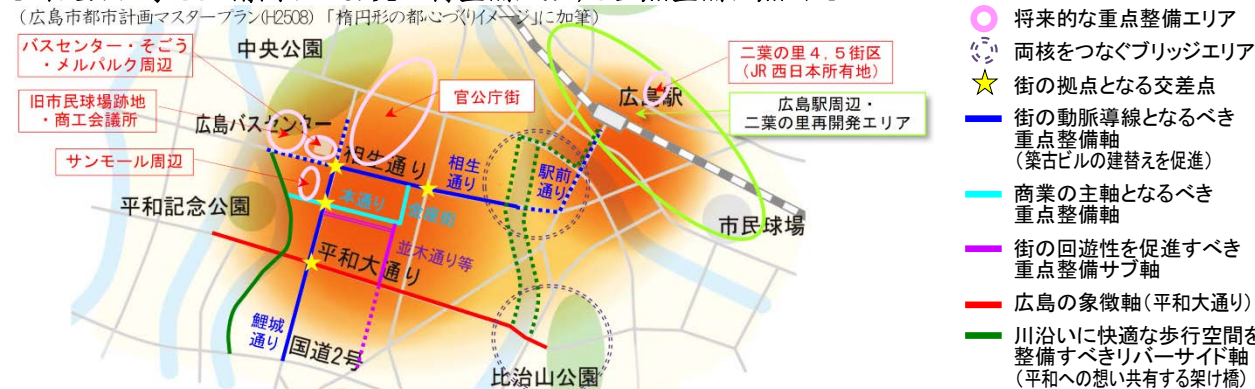
(2) 手遅れとならないための施策

☞ p.30～39

「楕円形のまち」の再整備は、これからの広島および周辺都市が発展して行くためにも最重要地点であり、50 年先を見据えた都市づくりのために、喫緊の課題に対策を打つ必要がある。

- ① 中心市街地の計画的機能更新の促進による、高質な都市ストックの形成 ☞ p.30～34

【同友会が考える「楕円形のまち」の再整備における重点整備拠点・軸】



- i) 街の動脈導線となるべき重点整備軸への対応：広島駅から紙屋町・大手町までのメインストリート
主な課題> 新耐震基準を満たしていない建物が多いことや、広島「顔」となる通りとしての景観形成において課題がある
・建物単位毎に地権者や区分所有者が多数存在し、各々が狭小な敷地に小規模なビルを建築している場所が多い
・上記 2 点も相まって、現代の企業が求めるスペックを必ずしも満たしていないオフィスビルが多いのではないか

対応策) 防災機能を高めながら中心市街地の活性化を図る
「楕円形の都心づくり」への対応案

- ・狭小な敷地を統合し、より大規模かつ効率的・機能的で、耐震性も備えた新築オフィスビルの建設促進
- ・地権者間の調整を行う専門家派遣等の制度を創設
- ・良好な街並みの形成への貢献に応じたインセンティブ付与により民間活力を活かす
- ・賑わい促進エリアにおける建物低層部(マンションも含む)では、まちの賑わい創出に寄与する施設(商業・観光・文化用途等)を積極的に誘導
- ・防災性の向上、地域経済の活性化、および都市の低炭素化に資するスマートコミュニティの推進
- ・まちの将来像を共有、具現化していくために「まちづくりガイドライン」や「地区計画」などのルールを策定

将来のまちのイメージ※1



- ii) 商業の主軸となるべき重点整備軸：本通り

- iii) 街の回遊性を促進すべき重点整備サブ軸：並木通り・袋町裏通り(うらぶくろ通り)他

- iv) 川沿いに快適な歩行空間を整備すべきリバーサイド軸

- ② 地域産業・経済の活性化の為の新機軸としての「MICE」への本格的な取組強化 ☞ p.35～39

MICE(Meeting・Incentive Travel・Convention・Exhibition/Event)は交流人口の増加による消費効果、産業振興、都市の国際化のための非常に有効なツールである。さらに、国際平和文化都市広島においては、広島に来て頂くことで被爆の実相に直接触れ、平和への思いを共有できる大きなチャンスの創出にもつながるものとする。

- i) 大規模複合型 MICE 施設の新設

主な課題> 広島市での国際会議の開催状況は、他の政令指定都市等と比較して大きな差があり、現在、平和記念公園を中心としてコンベンションエリアが構築されているが、2,000 人以上の会議開催回数は少ない状況にある。

対応策> 新たに 2,000～3,000 人が収容可能なメインホール等を備える大規模複合型 MICE 施設の新設を望む。
加えて、産官学民が一体となった MICE 戦略や推進活動も不可欠である。

- ii) MICE への取組強化のための交通インフラ強化

- ・大型クルーズ客船の誘致が進む広島港五日市埠頭エリアにおいても、広島港五日市地区周辺の整備並びに、広島市中心部や宮島などへの交通アクセスを整備、強化することが望まれる。

II-2. 50 年先を見据えたシナリオ案 —50 年先を見据えた賑わいの構築—

今後の新しい広島のまちづくりに向けて、自由で柔軟で活発な議論の呼び水とするために、規制や個々の事情など既成概念を離れて、50 年先を見据えた柔軟な発想により、当同友会独自にシナリオ案を考えた。

(1) 様々な世代が集い、共に成長していく元気なまちの構築(少子高齢化の現実を踏まえて)

☞ p.40～43

主な課題> 広島大学も高度成長期以降、学生の増加への対応や大学施設の充実などを目的に、新たな拠点を求めて郊外に立地が広がり、都心部での学生の活動は減少している。

対応策> 学生確保のため、大学の都心回帰が始まっており、地方大学の活性化や高度な大学機能集積の観点からも、都心部を中心とした大学間連携や、中心市街地でも学生が集う環境を整備していく必要がある。

「大学生をはじめとした若年層への対応シナリオ案」 ☞ p.42

- ① 継続的に学生が地域活動に参加できる活動拠点を街中に整備(空き店舗の活用など)
- ② 既存施設・設備の活用による高等教育機関の連携強化
- ③ 国公立、私立を問わず、都心と周辺地域と役割分担(適材適所)した教育体制の構築、一部学部を中心地への移転の推進等

(2) 公共施設の移転(更新)を起点とした都市機能の再構築(施設の老朽化を踏まえて)

☞ p.44～46

主な課題> 老朽化した建物や、容積率も少ない低効率利用の官公庁施設も多く建ち並ぶ「基町・八丁堀・上八丁堀地区の官公庁エリア」は、広島中心部における将来のまちづくりに関して重要な拠点になり得る希少な土地である。

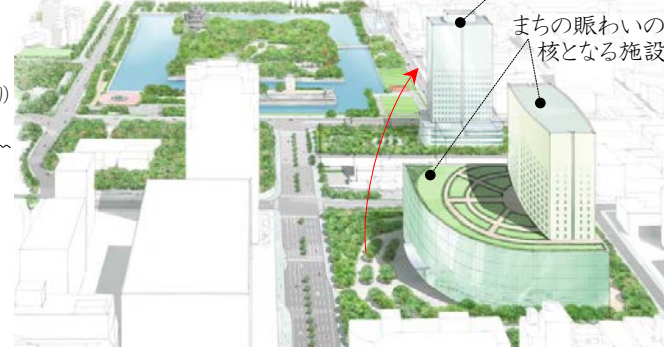
対応策> 国と地方公共団体とが連携し、国有財産の最適利用を進める過程において、地方創生・都市機能更新・建替促進の観点も含め、計画的且つ効率的な連鎖型のまちづくりを計画し、まちの更新を誘発する必要がある。

「県庁の移転を起点とした連鎖型のまちづくりによる広島再活性化シナリオ案」 ☞ p.45～46

- ・例として県庁の移転、高層化・集約化により空いた土地を起点とした、まちの機能更新を考えた。(防災面や他都市事例より)
- ・県庁舎の集約・高層化による移転により、土地が生まれ、新たなまちづくりが始まることを示したい。

- Step1 他場所に耐震性の高い新県庁舎を建設し、県庁を集約移転
- Step2 県庁跡地にまちの賑わいの核となる施設を建設もしくは誘致
- Step3 統合されたコンベンション施設(敷地)のその後の活用
※Step2 で周辺のコンベンション施設を統合し、拡張した MICE 施設を建設した場合

将来のまちのイメージ※1



※現在の広島市民病院は、背面の新県庁舎を表現するために、線のみで描いている。
また、例として示した県庁や中央庭球場の移転(先)についても限定したのではない。

II-3. 今回の提言のまとめ

☞ p.47～48

- ・50 年先のまちの将来像に向かい、思い(理念)を共有した「まちづくり」を進めていくためには、机上の議論だけではなく、それを継続的に行動に移すことが肝要である。そのためには、「産官学民が一体となって継続的にまちづくりを議論、推進出来る新たな仕組み・体制づくり」が早急に必要である。
- ・さらに、今後も想定される人口減少や人口構成の変化、激化するであろう都市間競争に打ち勝ち、賑わいを持続発展させていくためにも「手遅れとならないために必要な施策」をタイムリーに打つことが肝要である。
- ・中心市街地での若者の活動低下、施設の老朽化の進行などの課題を超えて、連鎖型の街づくり等による機能更新を考慮した「50 年先のあるべき姿」を、産官学民の皆で確認し実現していく不断の努力が必要である。
- ・本提言が、産官学民が一体となり「将来の理想の姿＝皆の思い＝ビジョン」に向かって進み、「50 年先も輝き続ける広島」を実現する一助となることを願う。

〔図表(再掲)〕 街の動脈導線となるべき重点整備軸における、将来のまちのイメージ ※説明用の吹き出しを追記



自転車
レーン

LRT(路面電車)
レーン

BRT(バス)等
レーン

自動車
レーン

自動車
レーン

BRT(バス)等
レーン

LRT(路面電車)
レーン

自転車
レーン